

世界の大きな流れを解く力ギは「中国」にあると思えるのだ

「政治・経済」を透視する

◎橋爪大三郎

役に立つあてもない読書は暇つぶしだし、知識がかえって邪魔になる場合もある。そんなのくそくらえ。例によって変わらばえしな、政治・経済関係の本をわくわく読みたければ、はつきり見通しを持つことだ。たとえば、こんなのはどうだろうか。

中国が二一世紀、ついに、世界最大の超大国となる。約四〇年後には、GNPで世界トップに躍り出るだろう。そういう予測が最近、アメリカから流れてきた。言われてみれば、なるほどと思う。

中国の人口は、日本の約一〇倍。そんな彼らが、ちょっと人並みの暮らしをするだけで、たちまち日本のGNPに肩を並べてしまう。

もし生活の質を上げれば、日本やアメリカを追い越すのは間違いない。四〇年もたてば、きつとそ

うなる——かどうか、詳しく予測してみないと何とも言えないが、その辺がなるべく明らかになるように、補助線を集めてみよう。

リカードウの『経済学および課税の原理』（岩波文庫・上下各五五〇円）は、よくできた本だ。その当時から現在まで二〇〇年間の、世界関係の筋書きになっている。なかでも白眉の国際貿易論。

各国の生産物が相対価格差によって移動し、比較優位にもとづいた国際分業が実現する。ここで自国の利害を押したて、貿易の秩序に介入するのは愚かなことだ。保護主義にせよ、植民地政策にせよ、結局高くつきますよ——。

ところで生産物が移動するのには、生産要素（土地・資本・労働）のほうはなぜ移動しないのか。土地が移動しないのはまああ

たり前。資本は移動するの考えてもよく、そうしたモデルで議論してもいい。いっぽう、労働が移動できない理由は、おそらく文化障壁（言語や生活習慣の壁）によるので、これが人類を互いに隔てている。地表を覆うしましまのまだら。国境をめぐらす国民国家の実態とは、これであろう。

この世界関係の行きつくところを、レーニンが『帝国主義』（岩波文庫・四〇〇円）で描いた。自由貿易以外のところから利益をえようとして、貿易ブロックをこしらえた揚げ句、衝突が避けられなくなる。二度の世界大戦も、こうして生じた。

すべれた予言書があった

注意したいのは、この二冊とも、予言の書であること。単純な

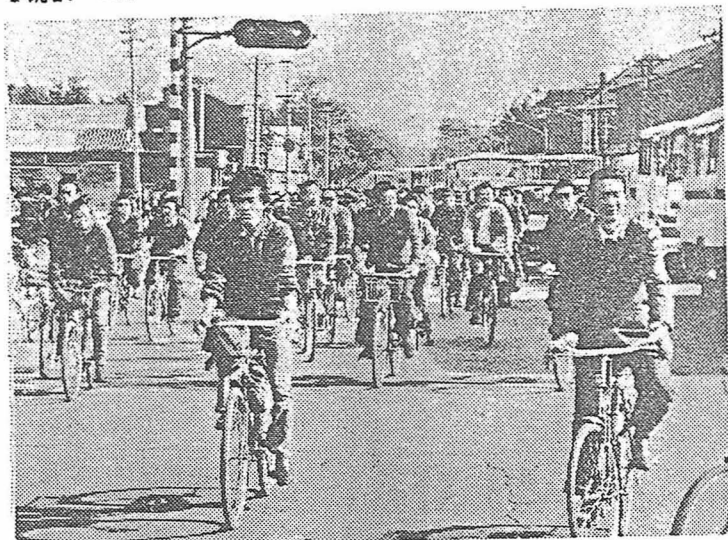
前提から世界関係の先行きを見通していく手際は、見事である。これに匹敵する書物は、いま、どこにみつかるだろうか。

核時代は、戦争凍結の時代。レーニンからリカードウへ逆もどりで。嘘みだいに長続きする自由貿易のもと、日本がわが世の春を謳歌する。あんまり得しすぎて、米ソ二極構造の足下をぐらつかせてしまった。これからは中心のない多極時代。さあ、どうする。

猪口邦子『ポスト覇権システムと日本の選択』（筑摩書房・一四〇〇円）。去年話題のこの本は、アメリカがあらちから手を引かけている現状をタイムリーにとらえ、悪くないと思うのだが、射程がまだ短い。よくできたリポートという印象。これは、けなしているのじゃなく、日本人がこれま

▶はしづめ だいさぶろう 1948年鎌倉生まれ。東大大学院修了。在野で新しい社会理論を構築中。著書に『言語ゲームと社会理論』など。

☆読書ゲーム術



中国から世界が見える

でこういうことを考えるのが苦手で、議論の蓄積がなかったから仕方ないのです。

さて中国だが、自力更生とか言っているうちは、貿易の利益にあずかれない。『毛沢東選集』（東方書店・全四巻・各五〇〇円）あたりによれば、中国革命の目標は、まず、植民地支配の打破と独立の達成。つぎに、国内の封建勢力打倒。それから社会主義建設だった。それ

株のこわさを教えてくれた本

●今村隆喜（早稲田大学証券学会）

『学生が書いた小遣いかせぎの株』（早大証券学会編・日本実業出版社・680円）は私たち早稲田大学証券学会の部員4名で執筆したものです。証券学会は株式の研究を中心に活動しているクラブですが、この本は、新人類と呼ばれた私たち学生投資家の株式に対する考え、投資経験、株式理論などを1冊にまとめたものです。

『実録・株の世界』（安田二郎・廣済堂出版・1300円）株で成功して有頂天、株式相場を制したような気になっていた私に、株の裏の世界、投資のこわさを教えてくれました。

『錦織』（宮本輝・新潮文庫・320円）

私は学生時代に小説を好んで読みましたが、心に残っているものの1つがこの本です。浮気が原因で離婚した夫婦が偶然旅先で再会してから始まる手紙のやりとりが記された書簡体の小説です。愛し合っていたながらも別れてしまった男と女の悲哀が描かれています。

『北の海』（井上靖・新潮文庫・640円）

この本を大学受験の前に読んでいたならば、あるいは偏差値主義に陥ることなく自由に大学を選んでいたかもしれません。蛮カラ学生に憧れ、小説の舞台となった金沢に行きたくなりました。

『古都』（川端康成・新潮文庫・320円）

読書が嫌いだった私が本好きになるきっかけとなった作品です。それ以後、日本文学を中心に本を読むようになりました。

いる。共産党の正統性と国家は一体のものだから、それを否定すれば国家は崩壊してしまう。いっぽう中国では伝統的に、目標（人民の福祉）を実現してこそ政治は正統なのだ。ゆえに共産主義は、国家の内部で安楽死できる。資本主義への移行も容易だろう。

こうした分析にいちばん役立つのは、いまでもマックス・ウェーバーの『経済と社会』（創文社・全七巻・二千一三八〇〇円）だ。各文明ごとの、宗教や生活様式や経済倫理の綿密な比較分析。これ

ほどの仕事は、その後出ていない。本物が無理なひとは、せめて小室直樹『ソビエト帝国の崩壊』（光文社文庫・四〇〇円）、『資本主義中国の挑戦』（カッパブックス・六五〇円）でも読みましょう。

われわれは中国について、何を知っているだろうか。日本は、大國を手本とせずやっていけない国である。それで、さんざ中国ベったりやってきたくせに、中国より強い国があるとみるや、ちょっと手のひらを返すように、やれ

英国、やれアメリカ、と尻尾を振る。フランス現代思想の新しいがどっこなど、その尻馬のくちですよ。そんなこととうつつを抜かしいるあいだ、中国に関するまともな研究が、各国で進んでいる。たとえばドイツの若手医学史家 Uschult の「Medicine China」ひとつをとっても、わが国の遠く及ばない水準だという。中国が世界の中心としていよいよ動きだす日、気がついてみたら日本だけが中国のことを何も知らなかった。どうもそうなりそうな気がする。思うに中国は、方言からできている国ではないか。ヨーロッパは

諸民族の言語からできているわけだが、それは違う原理だ。ヨーロッパの共通項は法だが、中国の共通項は漢字である。同じテキストを、ちがった方言で読むのである。だから日本は、方言に入れたらもうと、千年以上にもわたって、中国語で公文書を綴ってきたのだ。

中国が方言でできていることは、料理をみてわかる。中国料理と言えど乾物である。干しエビや干し椎茸（「漢字」が、古来発達した流通システムに乗って、各地の料理文化、「菜」（「方言」）を成立させる。陳建民「中国料理技

術入門」（柴田書店・三八〇〇円）だって、立派に経済の本として読めるのだ。

漢字は、知的な特権階級と、中国独特の支配システムを生んできた。その営々たる歴史は、宮崎市定「科挙」（中公文庫・三六〇円）に詳しい。文化音痴の中国共産党が、簡体字に熱心なのはいいが、その程度では埒があかない。

だから、ワープロや自動翻訳機が普及して、いちばん助かるのは中国だ。おかげで国内の支配メカニズムが変化して、ようやく民主政治が可能になる。中国人民も人口にみあったパワーとして、世

界に登場できる。

フランス語だろうと何語だろうと、中国語に自動変換できるなら、わが方言の一種ではないか。中国はそうやって、世界を理解できる。ヨーロッパ流の法による支配は、国境を不可避とした。いま、リカードの描いた世界関係の前提——労働が移動不可能なこ

と——が崩れはじめるなら、国民国家を支えた生活圏のまだら模様が、方言からできている集団のようにならぬ。入るきりきりしていくことができないではないか。それが四〇年後に始まるというのなら、すばらしい。

リアリティー欠く認識の底には イデオロギー優位への偏見がある

「ソ連」分析

四つの手法



◎袴田茂樹

従来日本人がロシアを「読む」手段に、大きく分けて三つあった。ひとつは明治以来われわれが日本文学と同様に親しんできたロシア文学である。第二はレーニ

ン、トロツキーなど革命家やマルクス主義理論家の書いた共産主義理論や各種のロシア革命論、またソ連共産党の公式的な政策文獻だ。第三は、具体的なロシア報告

やさまざまなロシア論。これとは別に、第四のアプローチとして最近ようやく、学問としてのソ連研究も生まれつつある。

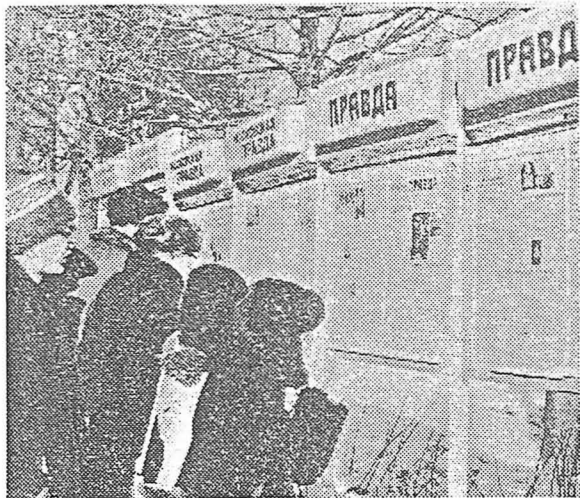
のソ連認識がリアリティーを欠いた最大の理由は、共産主義の理念から、あるいは政策論や制度論によってソ連を理解しようとしたところにある。ソ連はイデオロギー

機関を作ったとしても、それらは、本来の意図とは異なる機能を、いや、しばしば反対の機能を果たすからである。政策論、制度論の落とし穴もここにある。

さて、第一の文学を通じて知ることの長所は、何よりも具体的で、人間の内面や生活感覚までリアルに把握できることだ。ただドストエフスキーやトルストイの作品は観念的で、ロシア庶民に対する認識をむしろ誤らせてしまう。

「ゴルバチョフのブレン」

第二のアプローチとしては、ゴルバチョフ著『ペレストロイカ』（講談社・一六〇〇円）が異色だ。指導者の書いたものとしては珍しく、ソ連社会の問題点や欠陥を率直に指摘しており、新しい時代を感じさせる。西側の人間に理解できる言葉で書いているという点でも異例だ。西側社会をよく知っているブレンたちの影響が濃厚に感じられる。



きょうのペレストロイカ情報とは……

☆読書ゲーム術

によって動かされている社会主義国だから、マルクスやレーニン、ソ連共産党の政策を知れば、ソ連という国がわかると考えたところ

に、大きな過ちがあった。現実はいかなる理論やイデオロギーよりも複雑かつ豊かである。ある理念や政策に基づいて制度や

（新潮社・絶版）はロシア人をよく描いている。めばしい作家としてアイトマートフ、トリーフオ

ご注文は書店または下記へ

ペリカン便で
明日よめます
03-558-7331

オリジン出版センター



監修 瀬戸内寂聴・小田切秀雄・草野心平

田村俊子作品集 全3巻

四六判・450頁・布製箱入・3500円

●「青路」時代の「新しい女」のひとりとして、文学や女優に自己表現の道を求め、奔放な愛にいのちを燃焼させた最初の職業女性作家の全貌……鈴木悦との愛の未発表書簡を収録。
●推せん——湯浅芳子・山原鶴・佐多稲子・秋元松代・一ノ瀬綾・三枝和子・島尾ミホ・武田百合子・竹西寛子・津島祐子・本多房子・萩原葉子・松原一枝・吉行理恵
●第2回配本・第3巻
未発表の田村俊子愛の日記と書簡、鈴木悦の日記と書簡に加え、随筆選16篇を収録。——俊子文学研究に新しい一頁を開く！
●解説＝瀬戸内寂聴・解説＝黒澤亜里子

松橋忠光・大橋秀雄 1800円

ゾルゲとの約束を果たす

——真相ゾルゲ事件——
人間的な平和主義者であり、当時の日本研究者でもあったリヒアルト・ゾルゲとはどんな人物であったか？
「ゾルゲの遺言」「アドルフに告ぐ」「土壇場でのハリー・ライム」など、いまも傑作スパイ・ドラマを生み出づける〈現代の暗部・ゾルゲ事件〉とは？その検挙の真相は？ゾルゲ取調主任大橋秀雄が、〈ゾルゲ・尾崎秀実の刑死〉をいたみつつ半世紀、ようやく「事跡公表の約束」を果たす畢生の書！

林 尚男 四六判・380頁・2300円

評伝 堺利彦

はじめて明らかにされた社会主義の（父）の全容——不屈の革命家・軽妙なユーモリスト・卓越した文章改良家、そして先駆的な女性論の開拓者——堺利彦はラジカルな反体制の思想家であっただけでなく、しなやかに生きた〈生活者〉、〈人間の顔〉をした社会主義者であった。

東京都新宿区岩戸町16 電話03-260-0453

▶はかまた しげき 1944年広島生まれ。東大卒。青山学院大教授。著書に「ソ連 誤解をなくす25の視覚」など。